或るじん肺患者のレポート

病室を生涯の住居に

気こそ取り直したものの

改正労災法は今じん肺患者の間に一つの波乱を呼び起こし、改めてじん肺患者の苦しみが目をひいている。そんなじん肺患者の一人に、土村健二郎さんがある。

病院が住まい

土村健二郎さんは、今年五十二歳。（大正十四年二月二十一日生れ）荒尾市西原町の高岡病院に入院。その明るい病室を生涯の住まいとしながら、療養生活の日々をおくっている。

部屋には、軽洋服ダンスがある。整理ダンスがある。テレビもある。それに冷蔵庫も。

趣味は囲碁や盆栽とかで、そういえばなるほど病室の一隅には折りたたみ式の碁盤があり、窓ぎわには大小の植木鉢がズラリ並んでいる。明らかに、じん肺患者土村さんが生きつつある、一つの小さな世界である。

もともと住まいは、同じ荒尾市緑ケ丘社宅桧町四棟の一隅。土村さんと入れ替え採用となり、いま三池炭鉱の事務関係の職場で働く妻の勝子さんが、ひとり住まい。三人の子どももそれぞれ成長し、家をでており、たとえ馴れたとはいっても、女のひとり住まいはさぞかしさびしかろう。

恐ろしい宣告

土村さんが、勝子さんと結婚したのは昭和二十四年一月二十日。土村さんが二十四歳、勝子さんが二十二歳のときだった。

三川鉱の掘進工だった土村さんが発病したのは、結婚後わずか七年めの三十一年十一月六日。それもいきなり〝管理四〟という重症患者だとの宣告。「あんたいまのうちに生命保険にかかっとくがよか」といわれびっくり仰天。「俺の寿命はもうないのか。これでおしまいだとは」と、あまりのことに目の前が真っ暗になった日のことがいまも忘れられないという。

それもそのはず、三人の子どもは幼稚園に通う男の子をかしらにまだ幼く、またその頃は、じん肺患者の寿命といえばせいぜい五、六年とされていたことだったから。まだ三十一歳という、すべてがこれからのときで、以来すっかり火の消えたような毎日がうち続いた。

「これではいかん。体が悪くなるばかりではないか。妻子のためにも、なんとか一日でも長く生きることを考えなければ……」。土村さんが気持をとり直すことができるまで、半年はかかった。それまで、もちろん人の知らないところではきっと泣いていたに違いないが、妻の勝子さんが終始笑顔で夫の土村さんをはげまし続けたことをあげておかなければならないだろう。

見たものは？

ともあれじん肺宣告を受けた翌年の三十二年十月から、意を決して入院生活へ。妻子と離れ放れになり、そこを生涯の住まいとし、死に場所ときめるには、これまた一大決心が必要だったという。

さいわい子どもたちもそれぞれ成長を遂げ、世のなかで立派に身を立てている。またその後の二十一年間、五年ほどでおしまいだとばかりあきらめていた命も、さいわいにして恵まれてきている。

でも、その間七転八倒の末の末非業な最期を遂げていくじん肺仲間たちの姿も目撃してきた。体のほかの機関はいっさい異状がなくても、日一日、刻一刻コンクリート状に固まっていくじん肺は、しょせん窒息死からまぬがれることはできず、それを思うとゾッとするとのこと。医者も、なかには「あんたたちはもう見るな」と、死に場を見せない人さえある。

遅かった対策

土村さんは、まだ自分が坑内で掘進工として働いていた頃のことを語る。

「昭和二十五、六年からはやっと防じんマスクをかぶるようになりましたが、もう遅かったわけです。その頃までの掘進といえば、タオルをちょっと水にぬらしてはそれで鼻口を包んで働いたもんです。

粉じん舞い、続く高温

依然改まらぬ坑内保安

本紙が事実をひきながら警告してきているにもかかわらず、坑内の状態は改善されず、それどころか梅雨が終って夏場が近づくにつれ、各鉱の内は高温と坑粉じんでますます保安状況が悪化し、抗議の声がうち続いている。

宮浦ではけい肺の恐れが

宮浦鉱五十卸通気密閉箇所から「フライアッシュの充てん作業を中止せよ」、との声があがっている。じん肺患者が多発するのではないかが、恐れられているからだ。

「払跡充てん作業現場から、四十五昇の密閉作業場から、ホコリが、休憩所を、人車線路を、もうもうと舞いながら流れて行く。

慣れると何でもないようだけどそれは実は大変なことなのだ。フライアッシュには、あの恐ろしいけい肺病の原因となるけい素分が一八パーセントも含まれているのだ。他の有害物質と合わせて、確実にわれわれの身体をムシバンでいるのだ」

七月十一日発行の職場新聞〝宮浦〟は、こう書いている。

すでに知られているように、ホコリによる病気（けい肺、じん肺、炭素肺など）は、ホコリを吸ったからといってすぐ発病するものでないから、誰もが油断する。それは停年を過ぎてから発病する例が多く、いったん発病すればもう治ることがない病気。

「会社はフライアッシュの有害性は知っているはずなのに、何ら対策をたてようとはしない」

新聞〝宮浦〟は指摘するが、会社は危いフライアッシュ充てんは直ちに中止すべきである。

三川では打ちつづく高温

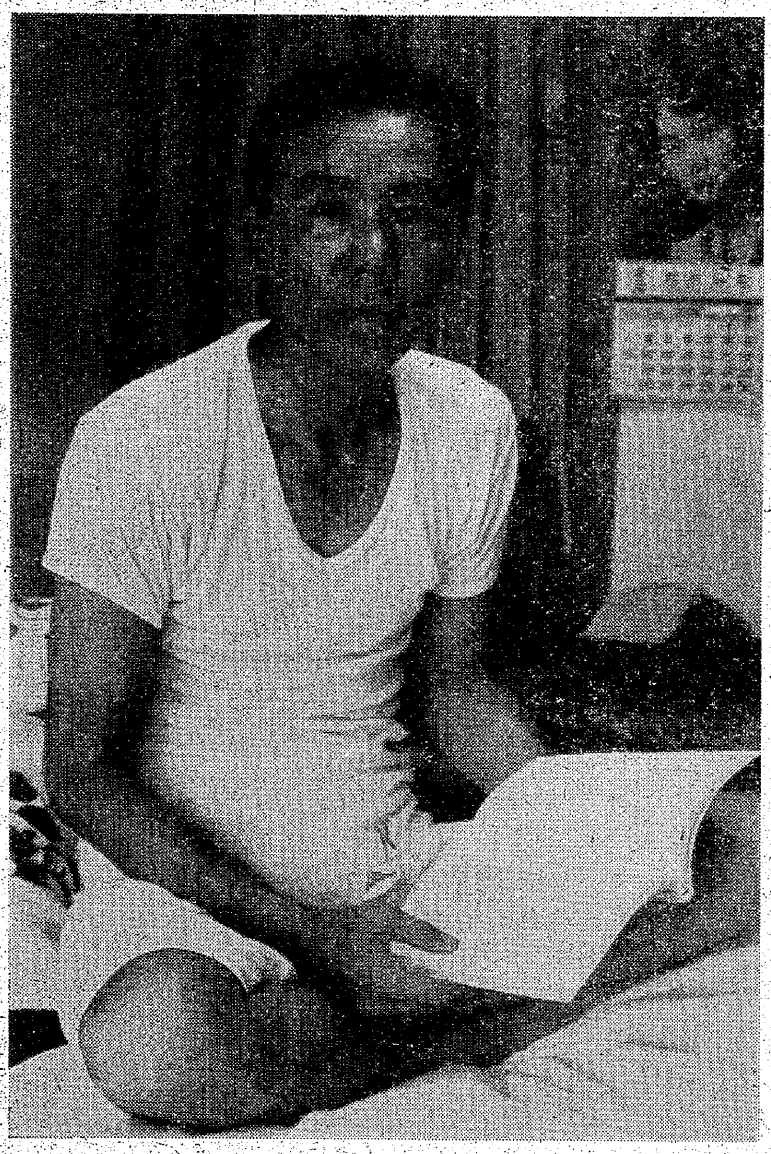
三川鉱の保線・開発部内から、各切羽が高温でなやまされている実態が職場新聞〝あせ〟によって伝えられている。

同部内の者は、まだ真夏でもないのにあまりにもはげしい熱さのために、坑内からあがるときともなれば目は落ちくぼみ、みんなぐったりまいっているという。

三池炭鉱にはいま、閉山していった。組合はいったい何をしているのか」

だから新聞〝あせ〟はいっている。

「冷凍機が間に合わぬなら、せめてウオータークーラーでも取りつけてもらいたい」



じん肺患者の土村さん。ベッドのうえでぽつねんと過すひととき。（高岡病院で）

閃光

じょうだんじゃねー首切り

千葉　斉藤　進

前略

今七七春闘において京成資本は運輸省を軸とし、政府・国家権力と銀行資本、大手資本との結託のもとにわれわれに、人べらし合理化と引きかえに賃上げ闘争の妥結を迫ってきました。

仲間もいっています。

「じょうだんじゃねー！赤字だ。不況だといって資本金はふえてるし、土地は買いしめているじゃねーか。俺たちは経営にタッチできないし、まして一生懸命働いてきた。俺たちを首切るなど、許せねー」

「俺の家は中小企業だが、親会社の息子が土地に手を出し、賃金を払えねーといっている。俺も京成を首になったら、家族も俺も、これからどうやって生活していけばいいんだ。許せねー」

乗客へビラを入れたり、地域へビラを入れたりして討論をしてきました。

なぜストをうっているのかを訴え、全組合員がせいいっぱい闘ってきた春闘でした。

今は参院選へ向けての取り組みに頑張っています。

×

斉藤さんは、千葉県松戸市稔台五八〇―一にお住いです。どうかしっかりがんばってください。

NO.1
1977
5.20

京成COニュース

発行　京成CO守る会事務局

発行に当って!!

京成CO退去を守る会　代表　青塚正道

三池の小いの火を京都に移めると、三池CO退去を守る会を結成して青年が国会に陳情運動をやったにもかかわらず約束の地点を守る会、会員もわかりなくなってしまう。当初は三池闘争の応援者、いつ工事にかりも三池への支援をいうカンパニアの会の人達が出てきたんです。

しかし何回かの陳情運動、京成前での CO退去やCO結成会、自治三川闘争委員会大牟田支援共闘会への支援会員の声が重点を中心、被害者大牟田市民の動員の呼びかけ、やっさんのガイドラン座談会開催、学生支援学会センターの結成をつくりあげ学生、市民動員の学習会を開かれました。

そして、会員の仲間のうちがCO退去を支え、今や生命と権利を守る闘いが民主主義の重要な闘争課題になっている。

私達、無所属労会員は、今迄、ひとりの人間としての尊さを友情し、職場守るやっての仲間達ともの中になり、建設、この仲間達会員に会員の仲間の地位を守ろうと、当初、動員を続っていたが急たく、そして、京成をおさえている、千葉県庁の政府に対する反撃の決意として、子孫分を法、動員しょうが提訴出ていただきたいと思う。

(1977.5.19)

P-1.

丸川　リンを守る会　事務局より

[illegible]

2 守る会の状況

現在、守る会の会員は、[illegible]

[illegible]

(1977.5.19)

P-2.

斉藤さんは、CO守る会員としても地域や職場で闘っていられます。このビラは、活動をアピールするビラの一つです。